

善のアイデアと魂の認識 ——『国家』における三つの比喩を通じて——

イウ マンイー

プラトンは『国家』の第六章において以下のよう述べている。すなわち、善のアイデア (η τοῦ ἀγαθοῦ ἰδέα)こそは学ぶべき最大のものであり、この善のアイデアが付け加わって始めて、正しい事柄もその他の事柄も有用・有益なものになるということである。(505a)しかし一方、我々はこの善のアイデアを十分に知ってはいないと彼は言った。そこで、彼は太陽の比喩、線分の比喩と洞窟の比喩という三つの比喩を通して、善のアイデアを説明しようとしたのである。

本稿において、我々はまずこの三つの比喩の内容をおさえることによって、善のアイデアに対する認識を深めたい。そして、善のアイデアはいかにして学ぶものなのかという問題を考察したい。

1. 太陽の比喩

確かにソクラテスは以上に述べたように善のアイデアは学ぶべきであると言った。しかし一方、彼はまた善のアイデアを我々は十分に知ってはいないと言っている。それはどういうことなのか。例えば、ある人にとっては善は快樂であり、またある人にとっては善は知恵である。しかし、善は快樂であると考え人は、快樂には善い快樂と悪い快樂があるということを認めざるを得ない。そのため、善は快樂ではないということが分かる。また、善は知恵であると考え人は、善はいかなる知恵かということを示すことができない。示すことができない以上、もちろん知っているとも言えない。こうして、善

についての論争は多くあるということは予測できるだろう。実は善について、ソクラテスも直接に語っていないのである。「善とはそれ自体として何であるかということ、今のところでは棚に上げておこう。なぜなら、現在の調子によって僕に思われることには到達していないということは明らかであるからだ。」(506e)そこで、ソクラテスはその代わりに善に最も似ていると思われるところのもの、いわゆる善の子供について語ろうとしている。その話は太陽の比喩だと呼ばれている。話の内容は以下の通りである。

我々にかかわっている「ある」というものには二種類がある。その一つは「多くの美しいもの (πολλὰ καλὰ)、多くの善いもの (πολλὰ ἀγαθὰ)、また同じようにそれぞれのものがあると、我々は主張し、言葉によって区別している」(507b)というところのものである。それらは見られるものであるが、思惟によって知られるものではない。もう一つは「我々はまた、美そのもの (αὐτὸ καλόν)、善そのもの (αὐτὸ ἀγαθόν)、またこのようにして、先に多くのものとして立てたところのすべてのものについて、今度は逆に、それぞれを一つのアイデアにしたがって一つのあるものとして立てたうえで、それを<そうであるところのもの>と呼んでいる」(507b)というところのものである。それらは思惟によって知られるものであるが、見られるものではない。

我々は見られるものを我々の視覚によって見る。しかし、それだけでは不十分である。目の中に視覚があり、そしてその中にはものの表面とか色とかが現にあるとしても、「太陽の光」という第三者がそこになければならない。「太陽の光」は視覚を最もよく見るようにさせ、見られるものを最もよく見られるようにしてくれるのである。視覚それ自身は太陽ではないが、感覚の諸器官の中では最も太陽に似ていると思われる。また、両者の関係は以下のようになっている。即ち、視覚は太陽から光を与えてもらいながら、その能力を持っている。また、太陽は視覚ではないが、その原因であり、視覚それ自身によって見られるのである。

以上に述べたような太陽こそは善の子供であるとプラトンは主張した。善は太陽を自分と類比的なものとして生み出したのである。即ち、思惟によって知られる世界において、善が知るものと知られるものに対して持つ関係は、見られる世界において、太陽が見るものと見られるものに対して持つ関係とちょうど同じである。太陽が視覚にその力を与えると同じように、善のアイデアは認識する主体に認識する能力を提供する。また、太陽が見られるものを明るく照らすのと同じように、善のアイデアは認識される対象に真理性を提供するのである。つまり、太陽が見るという働きの原因であると同じように、善のアイデアは認識するという働きの原因である。

2. 線分の比喩

ソクラテスは以上のように太陽の比喩を述べた。しかし、彼は、善は太陽に似ているという点についてもっと詳しく説明してほしいと聞き手の人に求められた。そこで、彼は太陽の比喩の延長として次の比喩を持ち出したのである。それは通称で線分の比喩である。話はまず以下のように太陽の比喩において語ったことを反復することから始まった。すなわち、これら二つの種族があり、それぞれは思惟によって知られるところの可知界と見られるところの可視界である。また、可知界の根拠になるのは善のアイデアであり、可視界の根拠になるのは太陽である。

以上のことを確認した後、話は線分の比喩の本体に入っていったのである。内容の要約は以下の通りである。

まず、一本の線分があると仮定し、それを不等の二つの部分に分ける。それぞれは見られる種族と思惟によって知られる種族を表す。そして、この分けられた二つの線分をさらに前回と同じ比例によって切断する。それを以下の図で示している。

$$\begin{array}{c} \text{A} \quad \text{D} \quad \text{C} \quad \text{E} \quad \text{B} \\ \text{AC} : \text{CB} = \text{AD} : \text{DC} = \text{CE} : \text{EB} \end{array}$$

線分の各部分はそれぞれ以下のことを表している。即ち、

- AC : 見られる種族、つまり可視界。
- CB : 思惟によって知られる種族、つまり可知界。
- AD : 似像・影、水に映る像、固い滑らかな、輝かしい物の中に映る映像。
- DC : ADのところの似像の原物に相当するもの。つまり、我々の周囲にいる動物、すべての植物、人工物。
- CE : EBの似像。魂はそれを探求する時、DCのところの原物を似像として用いながら、仮説(前提)から出発して、始原へさかのぼるのではなく結末へと進んでいく。
- EB : CEの原物。その探求することにあたって、魂は仮説から出発して始原へ向かって行く。また、CEで用いられた似像を用いることなしに、直接エイドスそのものを用い、エイドスそのものを通じるという方法で探求を進めて行く。

CEとEBについて、プラトンはさらに説明する。まず、CEについて、彼は数学に関係する事柄を通して説明を行った。数学などを勉強する人々は奇数と偶数とか、さまざまな図形とか、角の三種類とかをそれぞれの研究に応じて前提して、それらを既知のものとみなし、何一

つその根拠を説明することをせずに、そうした事柄を仮説として立てる。そして、それらから出発してすぐその後の事柄を論究し、最後に、考察の目標にまで整合的な仕方まで到達する。ただし、その時、彼らが論究しているのは描かれないかなる図形や角ではなく、それぞれの図形そのものと角そのもののことである。

EBについての説明は以下の通りである。それは言論それ自身が問答する力によって把握するところのものである。その時、言論はさまざまな仮説を絶対的な始原とするのではなく、むしろそれを踏み台として使用し、それによって、万物の始原に到達することになる。いったんその始原を把握することができて、今度は逆に、最後の結末に至るまで下降していくのである。その際、すべての感覚されるものを補助的に用いることは一切なく、ただエイドスそのものを用いて、エイドスを通してエイドスの中へ行き、そして最終的にエイドスの中に終わる。

以上の四分された線分は何かを表しているのか。「……四つのそれぞれの部分の上に、魂のうちに生じる次の四つの状態が対応してあると受け取ってくれたまえ。……」(511d) それぞれは以下のように線分に割り当てられるのである。

- 一番目の部分 (EB): ノエシス (νόησις)
 - －理解力, 理性, 知性
- 二番目の部分 (CE): ディアノイア (διάνοια)
 - －考え, 思考力, 洞察力
- 三番目の部分 (DC): ピステイス (πίστις)
 - －確信
- 四番目の部分 (AD): エイカシア (εἰκασία)
 - －印象

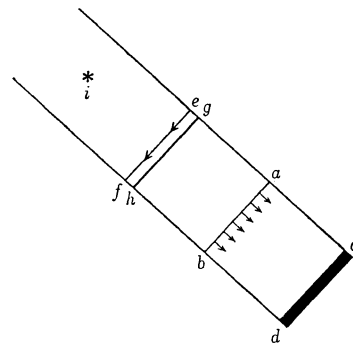
これらの精神状態は、それぞれの対象が真実性に近づくのに対応して、それと同じ度合いで明確性に近づいている。

3. 洞窟の比喩

洞窟の比喩は前述の二つの比喩の総合である。それは「今話したこの比喩(洞窟の比喩)を全体として、先に話した事柄(太陽の比喩と線分の比喩)に結び付けてもらわなければならない」(517a-b) というソクラテスの言葉から

はっきり分かることである。線分の比喩が魂の認識段階を示すことに対して、洞窟の比喩は教育と無教育ということにおける人間の本性を示すものである。その内容は以下の通りである。

まず人間たちを以下のように想定する。即ち、人間は子供の頃からその足と首が縛られて、地下の洞窟の中に閉じ込められた囚人のようなものである。その洞窟は外部の光が届かないほど長い通路を持っている。その中にいる人間は縛られているため、頭を後ろまで回すことができず、ただ正面を見ているだけである。彼らの背後の遠くには火が燃えていて、その光が彼らのところまで照らしている。火と囚人の間には一つの道があり、その道に沿って一つの低い壁が作られている。それはちょうど人形遣いが操り人形を出して見せる時に使う舞台のようなものである。その壁に沿って、多くの人々がさまざまな道具や木などの材料で作られた人間および色々な動物の像を、壁の上に差し上げて持ち運んでいる。彼らの中には黙々と運ぶ人もいれば、喋りながら運ぶ人もいる。



ab: 囚人の列, cd: 洞窟の奥,
ef: 火と囚人の間の道, gh: 低い壁,
i: 火 (図の引用: 『国家』藤沢令夫訳)

囚人たちは頭を回すことができないため、後ろの壁の上に運ばれるものを直接見ることができない。彼らが見えるのはただ洞窟の奥に映された影だけである。そして囚人たちが互いに話を交わすときには、彼らは運ばれているものたちをさしながらかし合うのではなく、ただ目に見えるさまざまな影を口にするだけである。また同じように、運んでいる人の声が聞こえるとしても、彼はその声が目に見える影から発する声であると考えるに違いない。要する

に、彼らが本当であると考えるものは全部さまざまな物の写しでしかないのである。

次に、このような囚人の一人が解放されたと仮定する。彼は立ち上がることもでき、自由に頭を回すこともできるようになった。その時、もし彼がいきなり強制的に火の光に向かって歩かされると、おそらく彼は苦痛を感じずらう。また、影ではなく実物を見ようとしても、彼は目まいをしまい、見定めることができないだろう。例え彼が今見ているのは以前より実物に似ているのだと告げられるとしても、彼はただ困惑に陥るだけであらう。彼にとって、以前に見ていた影のほうがよく真実性を持つと思われるだろう。

もしその彼が洞窟の外に引っ張られるとしたら、事態はどう変わるだろう。彼は突然に見えてくる眩しい太陽の光を嫌がって、そこにある真実なものも見ることができないだろう。彼には慣れるということが必要である。まず最初は影、次には水に映る映像を見て、最後には実物を見る。地上のものに見慣れたら、天空のうちにあるものと天空そのものを見ることに移る。その時もまた最初に夜の光と夜の星や月などを見慣れてから、最後に昼間の太陽の光を直視する。そうすれば、彼は上々に太陽を見ることができるようになるだろう。太陽それ自体を観察することができたら、おそらく彼は、太陽こそはある仕方で目に見える世界における一切の事物の原因であるように考えるだろう。

今度は彼が再び洞窟に下って、前と同じところに戻るということを想像してみる。おそらく彼は太陽のもとから急に暗いところにやってくるので、目が慣れるまでにはかなりの時間がかかるだろう。その時、彼は他の囚人たちが見ている影をぼんやりとしか見ることができない。そのため、彼は他の囚人の笑いものになってしまうのであろう。

洞窟の比喩の概要は以上の通りである。その後、プラトンはこの比喩がいかにして前の二つの比喩に対応しているのかを説明し始めた。その説明によれば、囚人の固定されるところは視覚を通して現れる領域を指し、洞窟の中にある火の光は太陽の機能を指すものである。また、

洞窟の外の世界は魂が思惟によって知られる世界であり、洞窟の外にある太陽は善のアイデアのことである。そして、囚人が上方に登って洞窟の外の事物を観察することは、魂が視覚によって見られる世界から思惟によって知られる世界へと上昇していくことを表している。

4. 善のアイデアと魂の認識とのかかわり

以上の三つの比喩から、我々は魂の認識についてのプラトンの考えを以下のように把握することができる。

(一) 魂の認識において二つの領域がある。一方は見られるものの領域で、例えば、多くの美しいもの、多くの善いものなど、我々が言葉によって区別しているものどもである。もう一方はこのようなものどもに依拠して定められるそれぞれのアイデアである。例えば美そのもの、善そのものなどのような思惟によって知られるものどもである。前者の認識は視覚、見られる対象と太陽の光から成り立つのである。それに対応して、後者の認識は思惟、思惟される対象と善のアイデアから成り立つのである。

(二) この二つの認識領域に依拠して、魂の精神状態を四つに区別することができる。多くの美しいもののような見られるものの認識領域にはエイカシア(印象)とピステイス(確信)がある。両方とも視覚で捉えられるものであるので、知覚とも言えるだろう。ただし、ピステイス(確信)は直接的な知覚であることに対して、エイカシアは間接的な知覚しかないのである。その真実性は前者に劣っている。また、美そのもののような思惟されるものの認識領域にはディアノミア(思考力など)とノエシス(理解力など)がある。前者は見られるものの領域の原物を似像として使うが、後者はそういうものを一切使わず、ただエイドスを使うだけである。両方も知識に属しているが、ノエシスは直接的な知であり、それに対して、ディアノミアは間接的な知であると言えるだろう。また真実性の点において、ディアノミアはノエシスに劣っている。即ち、この四つの区分における認識の真実性は高い順から並べると、以下になる。[ノエシス>ディアノミア>ピステイス>エイ

カシア]

(三) より低い認識の段階からより高い認識の段階に至るまで、魂が上昇という努力を果たさなければならぬ。ただし、いきなりの上昇は失敗に及ぶ危険性があるので、上々になれていく練習が必要である。それは似像から実物への慣れる練習である。このような練習が十分になってきたら、魂は知的な世界にある善のアイデアを見取ることができるようになる。そこまで至ると、魂は善のアイデアこそがすべての正しくて美しいものを生み出す原因であることに帰結することができるのである。即ち、善のアイデアは、見られるものの認識領域においては光と光の主を生み出し、思惟によって知られるものの認識領域においては真実性と知性を提供するものである。

5. 結論

我々は、『国家』の第六、七章における三つの比喩を通して、プラトンが魂の認識をどのように考えているのかを以上のように理解することができるだろう。またその認識の構造において善のアイデアの本質を一応把握することができたと言えるだろう。善のアイデアはすべての認識対象より超越的であるが、しかし認識という点において善のアイデアは認識の原因である。そして、原因である以上、我々は善のアイデアと魂との関わりを無視してはいけぬだろう。また、線分の四つの部分は魂のうちに生じる四つの状態を示すものであるとソクラテスが言った以上、我々は今まで述べてきたところの視覚によって見られるものは認識の対象であり、視覚のうちにあると言えるだろう。

テキスト及び参考文献

Burnet, J., ed. "Respublica". In *Platonis Opera IV*. Oxford Classical Texts. Oxford: Clarendon Press, 1902.

プラトン (藤沢令夫訳) 『国家』(下) 岩波書店, 1979
Adam, J. *Plato's Republic*. Second Edition. 2 Vols. Cambridge: Cambridge University Press, 1963.

(イウ マンイー, 広島大学大学院
文学研究科博士課程後期 [哲学])